

研究主題

自ら考え、発信する子の育成

～考える場を工夫した授業づくりをとおして～

1 主題設定の理由

いまだかつてなかったような急速かつ激しい変化が進行する社会を一人一人の人間が主体的・創造的に生き抜いていくために、学校教育に求められているのは、子ども達に、基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」を育むことである。

本校でも、これまで、「総合的な学習の時間」「かかわり」「基礎・基本」「評価規準」をキーワードとして「生きる力」の育成をめざして研究に取り組んできた。社会の要請にともなって新たな対応を迫られ、それに応えていくことは当然であるが、その一方で新たな対応が強調されるために、学校教育が担わなければならない本来の役割への意識が希薄化してきた傾向もある。いつの時代も「人格の完成」をめざして行われるべき学校教育の忘れてはならない役割、重視すべき働きかけとは何なのか、今こそ再確認して実践していくべきであると考えている。

一方、本校の子ども達に目を移してみると、明るく活発で、言われたことは素直に聞き入れがまばるといったよさはあるものの、自分で考え、判断して行動したり、周囲の人とうまくかかわりながら、物事に取り組んだりするといったことはあまり得意とは言えない。授業でも、事実を問うような簡単な発問には意欲的に答えるが、自分の考えを話したり書いたりするとなると、まだまだ自信をもてない子が多い状態である。

このような教育の現状や子ども達の実態をふまえて、昨年度より、「自ら考え、発信する子の育成」を研究主題に掲げ、研究に取り組んできた。考えることで発信内容が決定づけられ、発信することで自らの考えが整理されたり、他の考えとの比較から共通点や相違点を理解したりするなどの思考の深化が始まるととらえるならば、授業の中で考える場をどう位置づけていくのが課題となってくる。そこで、副題を「考える場を工夫した授業づくりをとおして」とし、授業の中での思考場面の位置づけや教師の指導・支援のあり方を試行錯誤しながら、主題に迫っていきたいと考えた。

本校では、主題にある「思考力」と「発信力」を以下のように捉え、研究に取り組むこととした。

〈思考力〉

単に問題を解く際に発揮される狭義の能力だけを指すのではなく、目的の設定、仲間の考えの理解、協働での創意工夫など、学ぶ場でのすべての思考内容に関連した力。

〈発信力〉

自分の思いや考えを伝える力。伝えることで吟味され、評価されることも始まり、自らの思考を補足修正していくことにつながるととらえ、そういった力も含むものとする。

昨年度は、研究の初年度ということもあり、共通の基盤や仮説がないまま研究授業を中心に実践を重ねてきたが、多様な視点から考える場を工夫した授業づくりがなされ、思考力の育成を柱として研究を進めることで、より質の高い授業を展開することができた。また、年間をとおして「考える姿」をイメージしながら研究を進めてきたことで、低・中・高の発達段階に応じためざす子ども像を共通理解することができた。

そこで、本年度は、昨年度の研究の成果を土台として、さらに研究を深めていくためにも、研究主題・副題を昨年度同様、「自ら考え、発信する子の育成～考える場を工夫した授業づくりをとおして～」とし、昨年度共通理解できた低・中・高別のめざす子ども像を研究の基盤として、それに迫る具体的な手だてを明確にしていくことで、6年間をとおした系統的な学習指導のイメージが共有化されていくのではないかと考える。

2 今年度の研究の視点

◎ 低・中・高別のめざす子ども像に迫る具体的な手だて（指導・支援のあり方）を考え、授業研究にもとづいて6年間をとおした系統的な指導のあり方を模索する。

- ・ 低・中・高別のめざす子ども像に迫る具体的な手だてを検証する授業研究
- ・ 思考を促す学習過程のあり方の模索（学習課題、学習活動、指導・支援・評価の工夫）

○ 話す・聞く・書くなどの基本的な学習技能・態度を育成するための発達段階に応じた指導のあり方を模索する。

○ 「総合的な学習の時間」でつきたい力を明確にした年間計画を作成する。

○ 本校独自の教育課程を作成する。

低・中・高別のめざす子ども像に迫る具体的な手だてを検証する授業研究

本年度は、昨年度共通理解した低・中・高別のめざす子ども像に迫るための具体的な手だて（指導・支援のあり方）を研究することで、6年間をとおした系統的な指導のあり方を模索していきたい。

○ めざす子ども像

低学年： **思いをもち、表出する子**

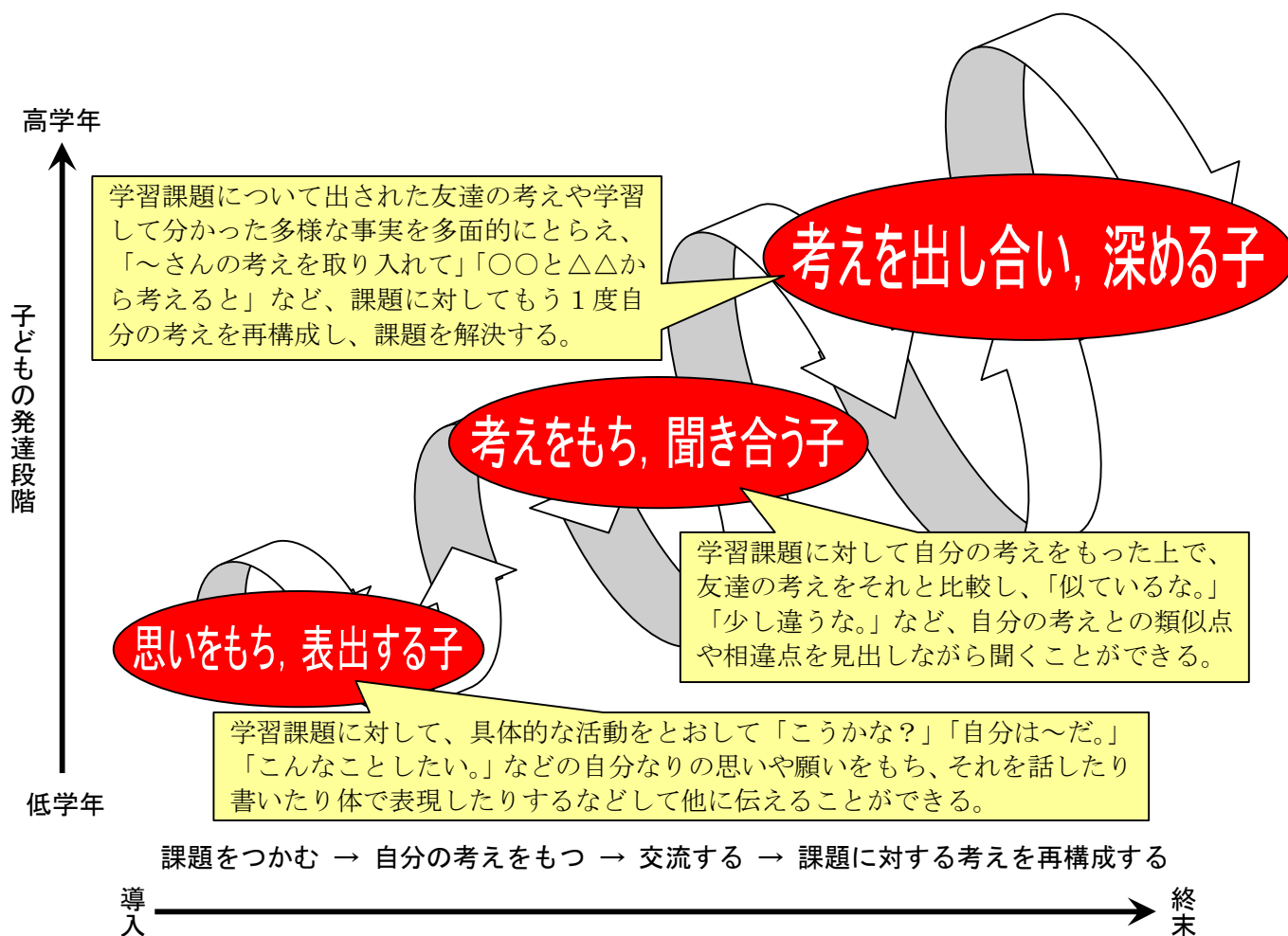
中学年： **考えをもち、聞き合う子**

高学年： **考えを出し合い、深める子**

これは、単に発達段階に応じた子どもの姿をイメージするものではない。つまり、子どもの発達段階に応じた指標とすると同時に、課題解決のプロセスをイメージして、低学年では、課題に対して自分の思いをもち、それを表出する段階、中学年では、表出された思いや考えと自分の考えとの相違点や類似点を見出す段階、高学年では、多様な考えや事実を分析し多面的にとらえながら課題に対して自分の考えを再構成する段階をめざすことを意味している。

このように、子どもの発達段階を縦軸、課題解決のための学習の流れを横軸としてとらえることで、課題解決に必要な思考力を6年間のスパンで系統的に育成していくことができるのではないかと考える。

そこで、本年度は、まず、低・中・高分科会ごとに、めざす子ども像に迫るための具体的な手だてを明確にし、その手だてが有効か、適切かを、研究授業を中心とした日々の授業研究をとおして検証していく。



思考を促す授業のあり方の模索（学習課題、学習活動、指導・支援・評価の工夫）

昨年度は、副題にある「考える場を工夫した授業づくり」をめざして、① 学習材の工夫、② 指導・支援の工夫、③ 学習計画の工夫、④ 学習課題の工夫、⑤ 学習活動の工夫、⑥ 学習形態の工夫など多様な視点で授業づくりの工夫が行われた。本年度は、昨年の成果と課題をふまえて、以下の4点を授業づくりの視点としていきたい。

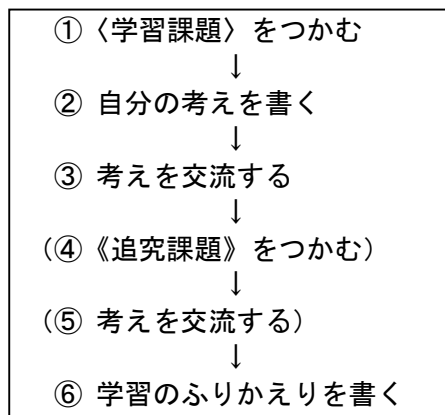
(1) 考える場を保障した課題解決型の学習過程

思考力の育成をめざしていくためには、学習過程の中で子ども達に考える場を保障していく必要がある。1年生から6年生までが、基本的な学習過程を共有化していくことで、授業中の思考場面を子ども達に意識化できるようにしていくとともに、6年間のスパンで思考力を育て

いけると考える。

その際、昨年度の実践で明らかになってきたように、課題に対して自分の考えを作り整理するためにも書く作業を取り入れていくことが有効だと考える。次に、各自の考えを話し合い、交流する場を設けることで、多様な事実や考えに気づくことができるとともに、研究主題にある「発信力」の育成にもつなげていけると考えている。さらに、授業の終末では、授業の始めの自分の考えと終わりの考えを比較し学習のふりかえりを書くことで、1時間の学習での自分の変容に気づき、学びの足跡を残すとともに、次時の学習へとつなぐ橋渡しとすることができると考える。

また、高学年では、「考えを出し合い、深める子」をめざして、事実認識をした後に追究課題を投げかけることで、より深い思考をともなった学習が可能になると考える。



(2) 学習意欲を喚起し、思考を促す学習課題（追究課題）の設定

課題解決型の授業が、子ども達の思考力を育てるものである限り、その学習のスタートとなる学習課題や教師の発問は子ども達の思考を促す上で大きな比重を占めている。

学習課題は、子ども達にとって、その授業で何を考えるのかを明らかにするものであり、教師の目から見れば、授業のねらいを達成させるための切り口となるものである。しかし、どのような課題を、どのように提示していけば、子ども達が意欲的に学習に取り組み、豊かに考え出すのかについては、まだ手探りの状態である。

そこで、本年度は、特に教科の本質に迫る思考を要する学習場面では、以下の例のように思考を問う課題になるよう配慮し、その質（内容）を吟味しながら授業に取り組んでいきたい。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ なぜ～、どうして～、どのように～、どうしたら～？・ どんな方法があるのか・ 違いや似ているところをさがそう、仲間分けしよう・ いくつあるのか、何通りあるのか？ |
|--|

(3) 豊かな思考を生み出すための、五感をととした学習活動の工夫

子ども達が豊かに考え課題を解決していくためには、その考えの土台となる確かな事実認識が必要である。そして、確かな事実認識をするためには、教師が一方的に知識を伝達していくような学習形態にとどまらず、子ども達自身が五感をとおして、自ら感じ、学びとっていくことが大切である。そこで、単元計画を立てる際には、以下の例のような学習活動をねらいに即して位置づけていくことが大切であると考えられる。

- | |
|----------------------|
| (例) 国語：音読、動作化など |
| 社会：体験活動、見学、インタビューなど |
| 算数：算数的活動（操作、体験、体感）など |
| 理科：実験、観察など |
| 生活：体験活動、人との交流など |

(4) 子どもの思考を支援する板書の工夫

教師が1時間の授業を構成していく際に、欠かせない支援の1つとして板書がある。板書には、学習内容を整理したり、学習内容を記録したりする役割はもちろん、板書をとおして子ども同士のかかわりを促し、思考を助ける役割がある。

そこで、以下の点に留意しながら、子どもの思考を支援する板書の工夫に心がけていきたい。

- ① 意図的な板書を行うために、事前に板書計画を立てる。
- ② 〈学習課題〉を明記する。
- ③ 書く言葉を精選し、キーワードで書く。
- ④ 関連や対比、経過などが分かるように構造的に書く。
- ⑤ 文字の大きさ、色づかいを工夫する。

3 研究組織

